



京大広報

No. 692

2013.9



オープンキャンパス2013
—関連記事 本文3983ページ—

目次

〈大学の動き〉

- 副学長が発令される……………3978
- 部局長の交替等……………3978
- 第56回京都大学未来フォーラムを開催……………3978
- 京都大学とブータン王立大学との大学間学術
交流協定を締結……………3979
- ロシア 極東連邦大学で開催のAPRU 第17回
年次学長会議に出席……………3980
- 平成25年度京都大学交流会を開催……………3981
- 思修館第一研修施設「廣志房」除幕式を挙
行……………3981
- 第1回「ジョン万プログラム」学生派遣等壮行
会を開催……………3982
- 「京都大学オープンキャンパス2013」を開催
……………3983

〈部局の動き〉

- 寄附講座・寄附研究部門の新設……………3984
- メディカルイノベーションセンター棟竣工
披露式を挙……………3985

〈寸言〉

- 人材育成とは？—京大探検部の4年間—
安成 哲三……………3986

〈随想〉

- 「雨庭」のすすめ 名誉教授 森本 幸裕……………3987

〈洛書〉

- 研究者の好奇心と社会的ニーズのジレンマ
森 信人……………3988

〈資料〉

- 平成25年度 総長裁量経費による採択事項
……………3989

〈話題〉

- 京都大学バリアフリーシンポジウムを開催
……………3990
- 「人間の安全保障」開発を目指した日アセアン
双方向人材育成プログラムの構築」第1回
AUN-KU 運営会議を開催 ……3990
- シンポジウム「シリーズ 私の仕事とキャリア
デザイン7」を開催……………3991
- 平成25年度総長杯(ソフトボール大会)を開催
……………3992
- 医農連携共同シンポジウムを開催……………3992
- 第8回京大病院iPS細胞・再生医学研究会を
開催……………3993
- 工学研究科でオランダのアイントホーフェン
工科大学スタディツアー受け入れを実施
……………3994
- ……………3995

〈計報〉

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

副学長が発令される

稲葉カヨ生命科学研究所教授が、8月1日付けで副学長に任命された。任期は平成26年9月30日まで。



男女共同参画担当
稲葉 カヨ (新任)

部局長の交替等

(新任)

学生総合支援センター長

青木健次カウンセリングセンター教授(相談心理学)が、8月1日付けで指名された。任期は平成27年3月31日まで。

第56回京都大学未来フォーラムを開催

7月2日(火)、本学工学部卒業生でヤマハ株式会社VOCALOIDプロジェクトリーダーの剣持秀紀氏を講師に迎えて、京都大学未来フォーラムが百周年時計台記念館において開催された。

講演の中で剣持氏は、歌詞と音符を入力するだけで歌声を作り出すことができるVOCALOID(ボカロイド)のビジョンや開発までの試行錯誤などを紹介された後、デモンストレーションを交えて実際の操作、楽しみ方を披露された。さらにこのVOCALOIDの登場は、アマチュアが好みにより手軽に音楽を作曲することを可能としたばかりでなく、ネット技術の発達と相まって自ら全世界に発信する道を開いたことにより、音楽の世界に大きな変化をもたらしつつあると述べられた。

参加者からは「第一線で活躍されている方のお話を聞け、とても充実したものであった」、
「歌が如何にシステムティック



講演をする剣持氏

にできているか、気付いていないルールがどれほど存在するのを実感することができた」、
「今後ボカロイドを使う側に回ってみたいと思った」などの感想が寄せられた。

(渉外部)

京都大学とブータン王立大学との大学間学術交流協定を締結

8月1日(木)に、本学とブータン王立大学との大学間学術交流協定が正式に締結された。

本学とブータンの交流の歴史は古く、昭和32年に第3代ブータン国王王妃Ashi Kesang Choden Wangchuk殿下が来日した際に桑原武夫教授と芦田譲治教授が対応したことに遡る。その後、多くの研究者による交流が続き、本学とブータンとの架け橋を強固なものとしてきた。平成22年には松沢哲郎霊長類研究所教授を代表とした京都大学ブータン友好プログラムが発足し、これまで79名の教職員・学生をブータンへ派遣、また同24年からはブータンから2使節団12名を招聘している。このような研究者による長い交流の実績を経て、ブータン王立大学との大学間学術交流協定を締結する運びとなった。

今回の締結に先立ち、5月3日(金)から6日(月)までの日程で、三嶋理晃 国際担当理事・副学長、松沢教授、松林公蔵 東南アジア研究所教授、吉川左紀子 こころの未来研究センター長、坂本龍太 白眉センター助教、加藤恵美子 東南アジア研究所連携研究員、小野一代 霊長類研究所総務掛長、伊藤朱子 研究国際部国際交流課主任の計8名が、ブータン王立大学との大学間学術交流協定締結のため、



ブータン王国保健省主催昼食会
左から松林教授、松沢教授、三嶋理事・副学長、Nima事務次官、Kinzang P. Tsheringブータン王立医科大学暫定学長



ブータン王立大学表敬訪問
(中央Pema Thinley学長が持っているのは松本総長自作の版画)

ブータンを訪問した。本訪問は、京都大学ブータン友好プログラムの第11次訪問団と位置付けられている。

この訪問では、ブータン王立大学の他、ブータン最大の病院であるティンブー国立病院を訪問し、ブータンで初めて設立される王立医科大学のKinzang P. Tshering学長と面談、すでに派遣されている西澤和子 霊長類研究所特別研究員に続く医療スタッフの相互派遣の実現に向けた議論が行われた。その他、Dorji Wangchuk 天然資源カレッジ長、Nima Wangdi 保健省事務次官、Karma Yeshey 教育省局長、Kunzang N. Tshering 外務省儀典長、Sherub Gyaltshen 農業森林省事務次官等の各関係省庁、大学の関係者と面談し、本学とブータンとの研究者・学生交流の全学的な促進について、議論を行った。

本訪問にて、三嶋理事・副学長が松本 紘 総長が署名した協定書をPema Thinley ブータン王立大学学長に手渡し、7月に新政府が発足したことをもってブータン王立大学側の署名が行われ、正式に締結されるに至った。

本協定の締結に基づき、本学とブータン王立大学の研究者・学生交流を全学的に促進することによって、さらなる研究・教育の発展が期待される。

(研究国際部)

ロシア 極東連邦大学で開催のAPRU 第17回年次学長会議に出席

京都大学が加盟するAssociation of Pacific Rim Universities (APRU) (環太平洋大学協会) の第17回年次学長会議 (Annual Presidents Meeting) が、6月27日 (木)、28日 (金) にロシア ウラジオストックの極東連邦大学で開催された。APRUは環太平洋圏の主要大学間の相互理解を深め、環太平洋地域社会にとって重要な諸問題に対し、高等教育機関の立場から協力・貢献することを目的として設立された大学協会で、現在16カ国 (地域) 42大学が加盟している。第17回年次学長会議には、加盟校から学長・副学長を中心に約90名の参加があった。本学からは、森 純 国際交流推進機構長、竹安邦夫 生命科学研究科教授、研究国際部職員2名の計4名が出席した。

今年の会議のテーマは、環太平洋地域の課題のための教育・研究・イノベーション分野における連携であり、会議の初日は特定の関連分野に焦点を当てた三つのセッションから構成された。最初のセッションは、「ロシアの変容 - 地方とロシアの成長と高等教育戦略」と題され、極東連邦大学のSergey Ivanets学長が議長を務め、5名の著名なロシアの政治家が基調講演を行った (Dr. Dmitry Livanov ロシア連邦教育・科学大臣、Dr. Viktor Ishayev 極東発展大臣兼極東連邦管区大統領全権代表、他)。

2番目のセッションは、「北東アジアと環太平洋地域の未来 - ロシア・中国・日本・韓国から見た成長と繁栄の見通し」と題され、ソウル国立大学のYeon-Cheon Oh学長が議長を務め、5名の参加者が基調講演を行った (植木俊哉 東北大学副学長「国際及び地域レベルでの国家の成長と防災の取り組みに対する災害の影響」、他)。

最後のセッションでは、「知識の政策への結合 - APRU加盟大学が環太平洋地域の課題に対してAPEC・政府・地域社会とどう一体となって関与すべきか」と題され、カリフォルニア大学ロサンゼルス校のGene Block学長が議長を務め、国際的な政策形成におけるAPRUの役割と可能性に対して4名の参加者から異なる視点で発表がされた。



年次学長会議参加者集合写真

また初日には、年次学長会議と併せて6月24日 (月)～28日 (金) の間に開催されたスチューデント・リーダーズ・フォーラム (SLF) の参加者による報告もあった。SLFはAPRU加盟大学の学部生・大学院生 (博士課程を含む) の間で協力と友情を促進することを目的に5日間の日程で開催され、本学からは工学部地球環境工学科4年の宮崎祐輔さんが出席した。

年次学長会議の2日目は、APRUの戦略的枠組みの三つの柱である「アジア太平洋地域の高等教育と研究の形成」、「アジア太平洋地域の課題解決のための提携促進」および「アジア太平洋地域におけるグローバルリーダーの育成」に関して、これまでの実施や進展についての討議から始まった。

その後、APRUの議長であるカリフォルニア大学サンタバーバラ校のHenry T. Yang学長の議事進行によりビジネス・ミーティングが行われ、APRUのメンバーシップの拡大可能性や2012年度財務報告書についての議論が行われた。また、理事会メンバー改選では、本年6月までの2年間の任期を満了した松本 紘総長の後任として平野俊夫 大阪大学総長が新たに選出された。

2日間の会議は、オークランド大学のStuart McCutcheon学長の議長によるオープンフォーラムを最後に盛会のうちに幕を閉じた。

来年のAPRU年次学長会議は、オーストラリアキャンベラのオーストラリア国立大学で平成26年6月に開催される予定である。

(研究国際部)

平成25年度京都大学交流会を開催

本学は、高等学校の教師や予備校等入試関係者を対象に、本学の教育研究と入学者選抜制度の概要ならびに次年度以降の入学者選抜制度の変更点等についての説明と意見交換を行う「京都大学交流会」を毎年開催している。

本年も、7月16日(火)に第1回目の交流会を百周年時計台記念館において行った。近畿地区をはじめ、東海・北陸・中国・四国地方の高等学校や予備校から、200名を超える出席者があった。

第1部では、淡路敏之 教育担当理事・副学長から本学の教育研究の特色を紹介し、さらに、先般発表した京都大学特色入試について説明を行った。

続いて、平成27年度入学試験において変更を予定している5学部6学科から、富田恭彦 総合人間学部長、服部良久 文学部長、山本克己 法学部長、植田和弘 経済学部長、湊 長博 医学部長、椎名 毅 医学部人間健康科学科長が選抜方法の変更点について説明を行った。

第2部では、「京都大学特色入試～これからの入学者選抜方法について」をテーマに、森脇 淳 理事補をモデレーター、淡路理事・副学長、惣脇 宏 総



第2部 交流会出席者との意見交換の様子。左から、森脇理事補、淡路理事・副学長、惣脇学事補佐、木南教授

長首席学事補佐をパネリストとして、さらに木南 敦 法学研究科教授より話題提供を受けながら、交流会出席者と意見交換を行った。意見交換では本学が現在検討している京都大学特色入試についての質問や意見が多く寄せられ、期待の高さを示す意見交換会となった。さらに、現在話題となっている「達成度テスト」や国際化についても意見交換を行った。

第3部では、本学関係者と出席者との情報交換等を行い、本学への理解を深めてもらう貴重な機会となった。

(学務部)

思修館第一研修施設「廣志房」除幕式を挙

本学では、平成23年度より文部科学省博士課程教育リーディングプログラム(オールラウンド型)「京都大学大学院思修館」に採択されており、本プログラムの理念に基づいた教育を実施するため、平成25年4月に独立した大学院として、総合生存学館(通称：思修館)を新設した。

このたび、この思修館プログラムの実施の「場」の一つとして設置した思修館第一研修施設が「廣志房」と名付けられ、7月23日(火)に松本 紘 総長自筆の銘板の除幕式を挙

行した。除幕式では、はじめに松本総長から挨拶があり、



除幕の様子

続いて、松本総長、淡路敏之教育担当理事・副学長、西阪 昇施設担当理事・副学長、川井秀一総合生存学館長、大寫幸一郎同副学館長・研修施設長、山脇 大プログラム履修生代表による除幕が行われた。その後、施設の内覧、懇談会がなごやかに行われた。

除幕式には、京都市、左京消防署、地元の吉田消防分団、町内会からの出席者や学内関係者など約80名の参加があった。

＜思修館第一研修施設について＞

思修館のカリキュラムの特徴として、大学院としては画期的な合宿型研修施設を提供している。研修施設では、学生が24時間起臥を共にし、多彩なバックグラウンドを持つ学生同士や教員との議論を通じて、多様な思考と実践力を培っていく。名称「廣志房」は“広い志を持った者が集うところ”という意味を込めて命名された。

(大学院総合生存学館)

第1回「ジョン万プログラム」学生派遣等壮行会を開催

7月22日(月)、第1回「ジョン万プログラム」学生派遣等の総長主催壮行会を本学本部棟5階大会議室にて開催した。

ジョン万プログラムとは、次世代のグローバルリーダーを育成する全学的海外派遣プログラムで、今回、第一期生として8月よりオックスフォード大学とケンブリッジ大学へ派遣される学生計33名が参加した。また、職員派遣プログラムとして米国USJI(日米研究インスティテュート)へ派遣される職員1

名も参加した。

壮行会は全て英語で行われ、初めに松本 紘総長から学生等への激励メッセージの後、各プログラム代表による決意表明のスピーチが行われた。終わりに赤松明彦学生担当理事・副学長による挨拶の後、さらに松本総長による英語・米語の発音の違いなどの講義があり、参加学生達は、熱心に話に聞き入り、ジョン万プログラム第一期生としての決意を新たにしていた。



松本総長他役員と派遣学生等の集合写真

(研究国際部)

「京都大学オープンキャンパス2013」を開催

今年で12回目となる京都大学オープンキャンパスが8月7日(水)、8日(木)の両日にわたって開催された。

「描こう、未来のベストデザイン。～心弾む、しなやかな京大～」をメインテーマに、今回も本学の魅力を伝えるための様々な企画が催され、キャンパス内は高校生、保護者ら多くの参加者で賑わった。

百周年時計台記念館百周年記念ホールでのオープニングセレモニーでは、オープンキャンパス委員会委員長の見平 典 人間・環境学研究科准教授による司会のもと、松本 紘総長による「京都大学を目指す皆さんへ」と題する講演があり、参加者は熱心に耳を傾けていた。続いて恒例となった応援団による演舞では、力強い演舞・演奏に会場内は大きな拍手に包まれた。また、「在学生からのメッセージ」では、医学部および文学部の先輩がそれぞれの受験体験や大学での研究について語りかけ、参加者は興味津々の様子で聞き入っていた。



松本総長による講演

「京都大学を目指す皆さんへ」と題する講演があり、参加者は熱心に耳を傾けていた。続いて恒例となった応援団による演舞では、力強い演舞・演奏に会場内は大きな拍手に包まれた。また、「在学生からのメッセージ」では、医学部および文学部の先輩がそれぞれの受験体験や大学での研究について語りかけ、参加者は興味津々の様子で聞き入っていた。

各学部においても説明会が行われ、学部長による



在学生からのメッセージ



応援団の迫力ある演舞



模擬授業の様子

歓迎挨拶の後、参加者は模擬授業を受けたり、研究室訪問や施設見学などを行った。

並行して開催された在学生の引率によるキャンパスツアー、相談・資料コーナー、在学生交流コーナー、各種講演会などの企画も盛況で、附属図書館や総合



学部相談コーナーの様子



在学生交流コーナーの様子

博物館の見学にも多くの参加者が詰めかけた。

連日の猛暑にも関わらず、オープンキャンパスには14,000人を超える中高生や保護者等が参加され、本学の雰囲気や魅力を十分に感じていただいたことと思われる。

受験生の志望校選びにオープンキャンパスは重要なものとなっているが、今回の参加者にとって本学への理解と関心が深まる機会になり、入学への意欲を一層高められたことと期待している。

(学務部)

部局の動き

寄附講座・寄附研究部門の新設

6月1日に医学研究科に寄附講座が新設された。概要は以下のとおりである。

てんかん・運動異常生理学講座(新設)	
1. 部局名	医学研究科
2. 名称	てんかん・運動異常生理学講座 (Department of Epilepsy, Movement Disorders and Physiology)
3. 寄附者	大塚製薬株式会社, 日本光電工業株式会社, グラクソ・スミスクライン株式会社, ユーシービージャパン株式会社
4. 寄附金額	総額 1億1千万円
5. 設置期間	平成25年6月1日～平成30年5月31日(5年間)
6. 担当教員	寄附講座教員(教授相当) 1名 寄附講座教員(准教授相当) 1名
7. 研究目的	1)臨床てんかん学の病態と治療と常に表裏一体関係である臨床神経生理学の研究と臨床応用の発展を、大学病院の立場から推進する。 2)集学的立場から、てんかんの病態解明と治療の開発、高度先進医療の推進、実践医療としての確立と普及を目指す。同時に、将来の本分野の担い手となる専門医と臨床研究者の養成と教育機会を国内外に広く提供する。
8. 研究内容	関連講座としての神経内科と共同で、てんかんおよび運動異常症の病態解明と新しい治療法の開発、各種脳機能診断方法の向上、基礎研究の推進、遺伝子多型によるテーラーメイド薬剤治療等を、総合的、効率的、包括的に進める。
9. 研究課題	1. 広域周波数脳波解析によるてんかん原性の解明とそれに適した医療機器の開発 2. てんかん外科治療の推進と臨床研究 3. てんかん焦点に対する各種機能イメージングと生理学的特性の総合的研究 4. iPS細胞を駆使した、てんかん原性の解明 5. 高度な専門医療者の育成のプロトコール研究

(研究国際部)

メディカルイノベーションセンター棟竣工披露式を挙げる

医学研究科では、「メディカルイノベーションセンター棟」(MIC棟)の完成を記念して、7月29日(月)竣工披露式、記念式典および祝賀会を開催した。

メディカルイノベーションセンター(MIC)は平成22年の設立以来、大学の基礎・臨床医学研究で得られる情報・リソースと企業の最先端創薬技術を結集して革新的医薬品の創出を目指し研究を進めている。今回完成したMIC棟は、創薬産学連携の拠点として経済産業省の補助金で建設された。MIC棟は、地下1階、地上5階の施設で、フロアごとに別々の企業との産学連携プロジェクトが活動している。現在、武田薬品工業株式会社とは「肥満症・統合失調症」、大日本住友製薬株式会社とは「がん」、田辺三菱製薬株式会社とは「慢性腎臓病」、塩野義製薬株式会社とは「アルツハイマー病や精神疾患」の新薬開発に向けプロジェクトを進めている。

MIC棟正面玄関前で行われた披露式には、学内外約170名の関係者が出席し、松本 紘総長、片瀬裕文経済産業省産業技術環境局長、山下晃正京都府副知事、門川大作京都市長、手代木 功日本製薬工業協会会長／塩野義製薬株式会社代表取締役社長、丸山 哲之武田薬品工業株式会社 コーポレート・オフィサー 医薬研究本部長、野口 浩大日本住友製薬株式会社 代表取締役副社長執行役員、加賀邦明田辺三菱製薬株式会社 代表取締役専務執行役員、三嶋理晃 病院担当理事・副学長／医学部附属病院長、小寺秀俊 渉外・産官学連携担当理事・副学長／産



MIC棟 外観

官学連携本部長、湊 長博医学研究科長、成宮 周メディカルイノベーションセンター長の12名がテープカットを行い完成を祝った。その後、成宮センター長、寺西 豊副センター長らが施設内を案内した。

これに引き続き、芝蘭会館にて竣工記念式典が行われた。記念式典では、湊研究科長の式辞、松本総長の挨拶に続いて、片瀬 経済産業省産業技術環境局長、門川 京都市長、手代木 日本製薬工業協会会長／塩野義株式会社 代表取締役社長、丸山 武田薬品工業株式会社 コーポレート・オフィサー 医薬研究本部長より祝辞をいただいた。

湊研究科長は、MIC棟の建設への支援と協力に感謝を述べるとともに「有効な治療薬の無い病気に、わが国発の革新的医薬を創成するとともに、人材養成にも大きく貢献できるものと確信しており、MIC棟の完成で革新的新薬の開発が一段と加速するものと存じます」と、今後MIC棟で行われる活動に対して大きな期待を込めた式辞を述べた。

その後行われた祝賀会では、成宮 センター長、小寺 理事・副学長、野口 大日本住友製薬株式会社代表取締役副社長執行役員、加賀 田辺三菱製薬株式会社 代表取締役専務執行役員から挨拶をいただき、高島昌明近畿経済産業局 地域経済部長より乾杯の発声をいただいた。参加者は和やかに歓談し、寺西副センター長の謝辞をもって、盛況のうちに閉会した。

(大学院医学研究科)



竣工披露式でのテープカットの様子

寸言

人材育成とは？
—京大探検部の4年間—

安成 哲三

私は1966年に理学部に入学し、学部、大学院(修士・博士課程)に11年間、そして助手として5年間、通算16年間、京大に在籍した。



学部時代、最初は山岳部に籍を置いていたが、2回生からはチリ・パタゴニア探検をめざして二人の仲間と共に探検部に移籍した。そのうちの一人は、井上民二君(その後、生態学研究センター教授。1997年ボルネオでの航空機事故で亡くなった。)であった。探検部とは、いい加減さと厳しさが混じりあった不思議な組織だった。今西錦司、梅棹忠夫、中尾佐助、川喜田二郎など京大を探検大学と呼ばせた^{そうそう}錚々たる方々を顧問としていたが、その伝統は息づいており、探検部の正式な探検隊(調査隊)として承認してもらうには、厳しい査定(?)制度があった。なぜその探検が必要か、現代的意味は何か、実行計画は妥当かなど、綿密に作成した計画書に対し、まず院生を含む先輩からの厳しい批判をクリアし、次に探検部長(当時は四手井綱英農学部教授)を説得し、最後は、前述の錚々たる顧問を一人ずつ訪問し、評価をもらう必要があった。教養部の英語の授業などはサボりまくっていた私だったが、計画書にはこれまでのパタゴニア探検のレビューなどをきっちりする必要があり、そのための文献探しを地理学教室や附属図書館で行い、辞書と首っ引きで英語の文献を読み、その抄訳を作ったりした。2回生1年間をかけてようやく部で正式に承認されると、部長を委員長とし、顧問なども名前を連ねた「京大探検部アンデス・パタゴニア調査委員

会」なるものが設置され、資金集めが始まった。資金集めはもちろん、部長や隊長になってもらった中島暢太郎教授(防災研究所)の重要な仕事であったが、私たちも彼らの会社回りのかばん持ちをやりつつ、自分たちでも多くの企業を回った。企業に顔の利く工学部教授などに頭を下げて紹介状を書いてもらい、それを持って会社を訪問し、募金を依頼するのである。紹介状もない「飛び込み」の募金や物品供与の依頼も含め、半年で800社ほど回り、予算の約1千万円(1968年当時)がほぼ調達できた。もちろん募金だけでなく、チリまでの物資輸送や現地調査のための準備、現地の関係機関との(スペイン語による)交渉など、様々な仕事をこなしていかなければならなかった。3回生の秋、乗船を許可されたチリへの鉱石運搬船が岡山県水島の製鉄所岸壁を離岸した時、苦勞がやっと報われたことを実感し、同乗の井上君と喜び合った。現地でもちょっとした事故を含めさまざまな問題が生じたが、4回生の春に何とか無事帰国できた。帰国してからも「探検は報告されてこそ意味がある」という鉄則に沿って、報告会や調査報告書作成、調査結果を基にした卒論書きなどの仕事が待っていた。このようなプロセスは、大学での研究や会社などの事業でも同じことであろう。折から全共闘運動の真っ最中で、自らの「探検」に対する「自己批判」も含めた報告書を作成した頃、5回生も終わりを迎えていた。

現在、京大でもリーダー育成、人材育成の様々な試みがされているが、大切なことは、学生の自由な発案・発想を大切にし、それを厳しくかつ暖かく育て、積極的に支援するという姿勢であろう。探検部の4年間はまさに私にとっての人材育成プログラムであった。

(やすなり てつぞう 総合地球環境学研究所長
昭和54年理学研究科(地球物理学専攻)博士課程修了)

随想

「雨庭」のすすめ

名誉教授 森本 幸裕

ゆっくり昇温する水にいるカエルは危機が知覚できずに死亡してしまうという「茹で蛙」の例え話。生物多様性の損失による危機もそのようです。天に唾してから己に災いがふりかかる経路が複雑で、時間スケールも空間スケールも錯綜していて、因果関係が実感しづらいことも多くて、ついつい対応が後回しになりがちです。



例えば京都の伝統行事の祇園祭。厄よけチマキの材料であるチマキザサが、もう京都北山では採れないという危機をご存知でしょうか。これは開花周期が百年以上ともいわれるササが一斉開花して枯れたあと、普通なら次世代が甦るのですが、今回は大繁殖したシカが芽生えをみな食べてしまうのが直接的な原因です。でもシカの天敵のニホンオオカミの絶滅が根本原因と考えると、それは百年も前なので、親の因果がひ孫に崇っている観もあります。雑誌Natureに掲載された、Rockströmらの評価によると、生物多様性の損失はもう既に地球の安全運転の限界を大幅に超えているそうです。でも、東日本大震災という熱い湯にびっくりしたカエルも無事には済まないようです。

「人が踏み込んだ分だけ戻されただけ 空も海も地も 人の心の中にも」

気仙沼港の近く、大津波で建物が全壊したあと、全国のファンに後押しされて再建されたという居酒屋「福よし」の店主の言葉が、地方新聞「河北日報」の1面コラムに載っていました。震災を、明治以降に生物多様性の要ともいえる水陸移行帯を埋め立てて豊穡の海に進出したことに遡って省みる、この店主のような謙虚な態度には心を打たれます。

なにせ、今後50年で我が国の人口は8千5百万人くらいに縮小する時代です。「国土強靱化」が図られるとのことですが、沈下の運命にある土地を埋立て、

巨大防潮堤を生物多様性の要の水際に張り巡らす巨大自然破壊は、ウナギの絶滅くらいではすまない悲惨な事態を招きかねません。地盤沈下して、明治時代に戻った豊かな生き物の生息する干潟や砂浜の恵みを楽しみながら、災害を柳に風と受け流す「賢い強靱化」は土地利用の再編のデザインが鍵でしょう。

さて、ここでご紹介したいのが「雨庭」レインガーデンです。これは都市が邪魔者として「抹殺」してきた湿地の生態系を都市全体のデザインの中に復活させる試みです。住宅の庭、広場、駐車場、道路植栽帯などを工夫して、雨を受け止め、保水、利用、浸透する「庭」です。これまで湿地や農地を都市化で滅ぼした結果、ヒートアイランド現象が激化するだけでなく、豪雨のときの内水氾濫も頻発するようになりました。下水道は時間雨量で50mmを整備の目安としているところが多いのですが、近年はこれを超える集中豪雨も頻発。不透水地が多く、一時的に水を貯める湿地や農地にも欠けるので、しかたなく大都市では、巨大貯水槽や河川を地下につくる動きがあります。でもこれは膨大な費用が必要な上に単一機能です。一方、みんながその気になって、都市全体に場所に応じた美しい「雨庭」を展開していけば、多様な自然の生態系サービスが復活し、低コストの減災が期待できます。大阪府では絶滅した植物84種のうち半数以上が湿地生であることを考えれば、都市の生物多様性の再生にも貢献するでしょう。

アメリカのメリーランドに始まり、世界に雨庭が広がっています。サケが遡上するシアトルでは、市当局がサケをシンボルに水質浄化に役立つ雨庭キャンペーンを展開して、街区全体に雨庭を導入しています。私は十五周年を迎えた京都駅ビルに、雨水と地下湧水のみを利用し、商用電源を使わない「緑水歩廊」を既存階段と遊歩道に設置して、絶滅危惧種を含む京都の自然を表現する「ビル型雨庭」を監修しました。これはラムサール条約の今年度の世界湿地の日の活動としても報告されたところです。都市が雨庭でしっかりと甦るのを期待したいと思います。

(もりもと ゆきひろ 平成23年退職 元地球環境学教授、専門は環境デザイン学、景観生態学)

洛書

研究者の好奇心と社会的ニーズのジレンマ

森 信人

私の専門は、海の波(海洋波浪)の力学的な特性の解明とその工学的な応用であり、台風や低気圧などの強風によって生じる波浪や高潮、また地震によって生じる津波などを対象とした防災に関わる研究を行っています。海の波は様々な応用がありますが、研究対象として自然を相手にするために、工学の中でも自然科学との接点が多く、学際的な研究としての面白さがあります。これまで科学的な興味から、特に波浪の持つ非線形特性についての基礎的研究を進め、特にフリークウェーブと呼ばれる嵐の中で突然出現する巨大波浪の予測モデル開発についての研究を行ってきました。

平成23年3月11日に起こった太平洋東北沖地震津波では、東日本太平洋側が甚大な津波被害を受けました。これまで長期に渡り日本の津波調査研究を中心的に担ってきた東北大学自体も被災するという事態となり、そこで防災研究所と関西大学の研究者が共同して、津波調査の事務局として、日本全体の陸上に残る津波の高さを計測する津波痕跡調査を運営しました。調査には、全国300名以上の研究者が参加し、事務局としては調査チームの編成、調査地点が重複しないためのチーム間の調整、調査データの取りまとめを行いました。特に調査データに重複がないように、昼に計測されたデータを翌日朝までに現地の調査チームに公開する必要があったため、最初の数ヶ月は文字通り寝る間を惜しむ作業が続きました。調査に参加していただいた研究者は、全員自前の研究費で参加して頂いており、太平洋東北沖地震津波では、日本の津波関連研究者は極めて迅速にかつ一致して行動したことは誇りに思えます。得られたデータが膨大であり、結局調査データの取りま



とめには、丸2年かかる大掛かりなものとなりました。日本全国各地に研究者が足を運び、とりまとめた調査結果は完全公開し、政府や地方自治体の復興計画の基礎資料として使われただけでなく、世界中の津波研究者の研究資料として広く活用されています。このような我が国の防災設計に直接役に立つ大規模な調査研究に携われたことは、個人的にとっても良い経験になったと感じています。

波浪や高潮の研究と異なり、津波研究は災害予測の推定から、対策や都市計画等の社会科学までカバーする幅広い応用研究であり、これまで行ってきた科学的な基礎研究とは随分考え方やアプローチが異なります。津波研究における災害の推定では、津波の発生、海上での伝播、陸上での遡上のプロセスの解明が重要となります。海底地盤の変位によって生じる津波発生部分は、予測困難な現象であるのに対して、津波の伝播・遡上過程は、物理的に記述が易しいという研究のコントラストがあります。これに加えて津波は、生起確率が数十年～数千年と極めて低頻度であるため、最大クラスどころか、どの程度の規模の津波がどの程度の頻度で生じるのかという大まかな情報すら求めることが難しいのが現状です。

現在、津波研究は社会からのニーズが高い状況です。特に南海・東南海地震に対して大きな津波が想定されていることから西日本における具体的な減災対策が進められており、我々研究者に対して応用研究をも超えた具体的な技術要請が多くあります。さらに、研究成果への世間の注目度も高く、社会・経済への影響も大きいため、研究成果の発表も慎重にならざるをえない現状です。

このような状況の中、知的好奇心を満たす基礎研究と社会ニーズの高い応用研究をどのように自分の中で配分していくべきかというジレンマがある今日この頃です。何とかうまくバランスを取り、両テーマで最先端を目指したいと思っています。

(もり のぶひと 防災研究所気象・水象災害研究部門准教授、専門は海岸工学)

資料

平成25年度 総長裁量経費による採択事項

平成25年度の総長裁量経費については、下記の21件が採択された。
採択事項および対象部局等は次のとおりである。

プロジェクト等事項名	部局名	関連部局
最も優秀な課程博士論文の出版助成制度	文学研究科	
若手研究者出版助成事業	教育学研究科	
若手研究者に係る出版助成事業	法学研究科	
若手研究者の優秀学位論文等出版事業	経済学研究科	
優れた数理科学の才能発掘事業(数学の森 in 京都2014)	理学研究科	
World Health Summit (M8) への全学的取り組み：持続可能性ある健康的な高齢社会の構築における医学と社会工学の連携	医学研究科	
食料・環境・農業に関する人文・社会科学領域の学位論文に対する出版助成事業	農学研究科	
若手研究者出版助成制度	人間・環境学研究科	
G30英語講義科目のオンライン化	情報学研究科	
最新研究成果を紹介・解説する動画の作成およびオープンコースウェアを利用した学外への発信	生命科学研究科	
若手研究者による人文科学諸分野の優れた研究成果の刊行助成事業	人文科学研究所	
若手研究者の論文出版支援事業	防災研究所	
若手医師等のブータン王国派遣による国際医療支援事業	医学部附属病院	
京都大学アフリカ研究出版助成	アフリカ地域研究資料センター	
TOEIC レヴェルアップ夏季集中講座—プラス100点を目標に—の開催	国際高等教育院	
MIT-Harvard edX プロジェクトへの講義提供	情報部 (情報環境機構)	
分野横断促進をねらったコミュニティ創出オープンプラットフォームの構築	事務本部 (学際融合教育研究推進センター)	
時計台ディスプレイ等のコンテンツ制作	事務本部 (渉外部)	
京都大学特色入試の導入	事務本部 (学務部)	総合人間学部, 文学部, 教育学部, 法学部, 経済学部, 理学部, 医学部(医学科, 人間健康科学科), 農学部
世界に飛躍する京大生のためのキャリア形成支援	事務本部 (学務部)	高等教育研究開発推進センター
学生課外活動支援経費	事務本部 (学務部)	

(財務部)

話題

京都大学バリアフリーシンポジウムを開催

6月29日(土)、30日(日)、障害学生支援室の主催により「京都大学バリアフリーシンポジウム—しなやかで、したたかな「障害学習」のすすめ」を理学部6号館南棟4階401号室にて開催した。このようなシンポジウムを行うのは、本学において初めてのことであったが、全国各地から2日間でのべ450名余りの方が参加した。

1日目のセッション1では、大学における障害学生支援の現状を知るための基調講演の後、学生の率直な声に向き合い、考える機会とすることを目的とし、本学の学生4名が日々の学生生活や障害に応じた修学支援についての座談会を行った。

2日目午前のセッション2では、本学で初めての全盲の学生であり、現在は国立民族学博物館に所属の広瀬浩二郎准教授をはじめ、視覚障害を中心とした講演があった。

2日目午後のセッション3では、本学が誇るユニークで最先端のバリアフリーに関する研究活動に触れてもらうことを目的とし、河原達也学術情報メディアセンター教授、大野照文総合博物館長、嶺



学生座談会で発言する本学の大学院生

重 慎理学研究科教授の講演があった。

また、様々な障害のある参加者への配慮として、点字資料と拡大資料の配布、手話・PC通訳による情報保障支援、移動介助を実施した。

シンポジウムを通じて、本学らしいバリアフリーに関する発信と、学生や教職員だけでなく、一般参加者も含めた有意義な交流の場となった。

(障害学生支援室)

※障害学生支援室は、8月1日より、学生総合支援センター障害学生支援ルームになりました。

「人間の安全保障」開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築」第1回 AUN-KU 運営会議を開催

7月17日(水)、タイのバンコクにあるPanthumwan Princess Hotelにおいて、大学の世界展開力強化事業プロジェクト「人間の安全保障」開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築」の第1回 AUN-KU 運営会議を開催した。

運営会議には、ASEAN大学連合(ASEAN University Network : AUN)加盟大学のうち本学とダブルディグリープログラムの実施を主幹する5大学(ガジャマダ大学(インドネシア)、マラヤ大学(マレーシア)、シンガポール国立大学、バンドン工科大学(インドネシア)、チュラロンコーン大学(タイ))

およびAUN事務局の各代表者と、本学からは縄田栄治人間の安全保障開発連携教育ユニット長・農学



出席者の集合写真



各大学の進行状況に関する報告

研究科教授、森 純一国際交流推進機構長をはじめとする7名が参加した。

各大学の代表者がダブルディグリープログラム実施に向けた進行状況を報告した後、本学とASEAN側主幹大学との間で二者間交渉を行った。具体的な諸課題に関する意見交換や取り決めが行われ、本年度後半からの修士課程ダブルディグリープログラム実施に向けて、実り多い会議となった。

(学際融合教育研究推進センター
(人間の安全保障開発連携教育ユニット))

シンポジウム「シリーズ私の仕事とキャリアデザイン7」を開催

7月19日(金)、女性研究者支援センター主催のシンポジウム「シリーズ 私の仕事とキャリアデザイン7『京都で研究する！－外国人研究者が語る京都大学での経験：International Researchers Talk About Their Experiences At Kyoto University』」を芝蘭会館別館(国際交流会館)で開催した。

山末英嗣 女性研究者支援センター広報事業WG主査の司会進行のもと、最初に稲葉カヨ 同センター
スバワン ジュンウィチャン
長の挨拶があり、その後Supawan JOONWICHIE
名古屋大学工学研究科研究員による“Studying
Experience in Kyoto University: Challenges,
Lessons, and Future Perspectives”, ジェーン シンガー
地球環境学堂特



シンガー 特定准教授

定准教授による
“Considering a
Non-linear
Approach to
an Academic
Life”の講演が
行われ、これま

でのキャリア、
研究、本学での
経験などについて話していただいた。

講演の後には、伊藤公雄
同センター女性



ジュンウィチャン研究員

研究者支援推進室長の進行により、質疑応答・ディスカッションを行った。参加者からの質問に答える形で、シンガー特定准教授は女性で外国人研究者であることで大変な点や、アカデミアで研究する女性教員の、女子学生へのロールモデルとしての役割などを話された。ジュンウィチャン研究員はプロクター&ギャンブル社に勤務された経験や、アカデミアで研究を続けることの利点についてなどを話された。その他にも、奨学金やポストの獲得の仕方などについて活発な意見交換が行われた。そして、伊藤室長によるまとめと挨拶により閉会した。

(女性研究者支援センター)

平成25年度総長杯(ソフトボール大会)を開催

7月20日(土)より吉田南構内グラウンドにおいて、平成25年度総長杯(ソフトボール大会)が行われ、12チームが参加した。当日は天候に恵まれ、厳しい



決勝戦の様子

暑さの中ではあったが、応援に駆け付けた同僚等の声援のもと、熱戦が繰り広げられた。

決勝戦は7月22日(月)17時30分か

ら行われ、施設部チームが逆転勝ちを演じ、見事優勝した。試合終了後の表彰式では、清水 尚総務部人事課福利厚生室長より優勝杯、表彰状、賞品が授与された。試合結果は次のとおり。

優勝：施設部チーム

(代表者：中村 守)

準優勝：人環・情報部・学務部チーム

(代表者：河崎 靖)



優勝した施設部チーム



準優勝した人環・情報部・学務部チーム

(総務部)

医農連携合同シンポジウムを開催

7月23日(火)芝蘭会館において、医学研究科と農学研究科の教員による、「医農連携合同シンポジウム～ライフイノベーションを医学と農学から見つめなおす～」を開催した。

農林水産省では、農林水産研究開発の10年後の重点目標を示した新たな「農林水産研究基本計画」に医農連携を重点の一つとして取り上げている。

また医食同源といわれるように、世界最長寿国の日本には古来より体に良いとされるものが多数あり、栄養・食と健康は深い関わりがあるとされている。医療の現場においても、食事制限や栄養障害の治療を通して、食は極めて重要かつ身近なテーマである。



真剣に聴講する出席者

両研究科は食と栄養を違う角度から扱うが、これまでその研究の全貌を語り合う機会がなく、今回が初めての医農連携合同シンポジウム開催となった。

医学研究科からは、松田文彦教授(疾患ゲノム疫学)が「分子を通してヒトの健康と病気を考える」というテーマで、また稲垣暢也教授(糖尿病・栄養内科)が「栄養とインクレチン」というテーマで講演した。農学研究科からは、松村康生教授(農学専攻・品質



評価学分野)が「農学研究科の研究活動概要－シーズ・リソース・テクノロジー－」というテーマで、松井 徹教授(応用生物科学専攻・動物栄養科学分野)が「マグネシウム栄養」というテーマで、河田照雄教授(食品生物科学専攻・食品

分子機能学分野)が「肥満・エネルギー代謝と食品機能」というテーマで、菅原達也教授(応用生物科学専攻・海洋生物生産利用学分野)が「水産物に含まれる食品機能性成分」というテーマで講演した。

食に対する関心の高さか、ほぼ満員となる盛況ぶりで、最終参加者は150人を超えた。講演後には予定終了時刻を大幅に超えて活発な質疑応答が行われた。参加者は医師、研究者、食に関する企業関係者など多岐にわたり、「食と栄養に関してより一層興味をわいた」、「このシンポジウムをきっかけに共同研究を始めたい」といった感想が数多く寄せられた。

本シンポジウムを継続しつつ、食と代謝をターゲットにした京大発の共同研究を医学研究科と農学研究科で推進することが期待される。

(大学院医学研究科・大学院農学研究科)

第8回京大病院 iPS 細胞・再生医学研究会を開催

医学部附属病院は、京大病院iPS細胞・再生医学研究会を7月25日(木)に芝蘭会館において開催した。同研究会は、同院におけるiPS細胞、ES細胞および体性幹細胞等を用いた再生医学研究の向上ならびに成果の普及を図り、ひいては医療の発展に貢献することを目的として平成21年11月に発足したものである。第8回目となる今回の研究会では、学内外から110名余りの参加があった。

研究会では、三嶋理晃 病院担当理事・副学長／医学部附属病院長の開会挨拶の後、山岸幸子氏(アステラス製薬株式会社 分子医学研究所)より「アステラス製薬におけるiPS細胞研究への取り組み」、櫻井英俊iPS細胞研究所特定拠点講師より「患者由来iPS細胞を用いた三好型ミオパチーの病態再現」、井上治久同研究所准教授より「iPS細胞技術を用いた神経変性疾患の研究」、井家益和氏(株式会社ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング(J-TEC)製品開発部



開会挨拶を行う三嶋病院長(左)、岡野東京女子医科大学 副学長・教授による特別講演(右)

部長)より「ヒト細胞を用いた製品の基礎研究から再生医療の産業化に向けて」と題する一般講演が行われた。

引き続き、岡野光夫東京女子医科大学 副学長・教授／先端生命医科学研究所所長／日本再生医療学会理事長より「細胞シートとiPS細胞の融合への挑戦」と題する特別講演が行われた。

(医学部附属病院)

工学研究科でオランダのアイントホーフェン工科大学 スタディツアー受け入れを実施

オランダのアイントホーフェン工科大学の教員・学生計26名が、7月25日(木)に本学桂キャンパスの工学研究科を訪問された。

今回の訪問はアイントホーフェン工科大学の応用物理学専攻が行っている数週間の海外スタディツアーの一環で、3週間にわたる日本でのツアーの1日を工学研究科で受け入れることとなったものである。桂キャンパスへは平成17年のスタディツアーに続き2度目の訪問となった。

1日ラボツアーのプログラムは、北野正雄工学研究科長・副理事の歓迎の挨拶、長谷部伸治同教授(工学研究科国際交流委員会副委員長)による本学および工学部・工学研究科の概要紹介、小島一信国際化教育担当講師によるラボツアー概要紹介で始まった。

午前中は、桂キャンパスAクラスターの電気系研究室のうち、光量子電子工学研究室(野田 進教授)、光材料物性工学研究室(川上養一教授)、集積機能工学研究室(掛谷一弘准教授)を訪問し、各研究室の若手研究者から研究紹介を受けた。

昼食時には京都市街を一望する桂ラウンジにて、両校の研究者・学生がなごやかな雰囲気の中で交流、意見交換を行った。

午後には、桂インテックセンターのシステムシ



桂キャンパスBクラスターの歓迎メッセージ前で

ミュレーションラボと極低温施設を見学、小森 悟教授(前工学研究科長)の説明に熱心に聞き入り、多くの質問が続いた。

続いて、Cクラスター(C3棟)に今春移転してきたばかりの物理系4専攻の中から、機械機能要素工学研究室(小森雅晴准教授)と、ナノ・マイクロシステム工学研究室(田畑 修教授)を訪問、機械系クリーンルームを見学し、その後、工学研究科学生とともにポスターセッションに参加した。

今回の受け入れは両校の交流を深めるだけでなく、本学工学研究科の学生・若手研究者の国際交流経験の機会を増やし、他文化の研究者との研究交流を通して視野を広めることも目的としている。



電気系ラボツアーで
実験デモに見入る学生



長谷部教授の茶道具の説明に
興味深く見入る学生



ポスターセッションでは
6研究室がブースを開設

各研究室での実験デモやプレゼンテーションも、教授だけでなく若手研究者、学生が大きな役割を果たした。午後のポスターセッションは学生と若手研究者を中心に運営され、各ブースでは活発な意見交換が行われるなど、若手研究者育成のためにも大変

良い機会となった。

工学研究科では今後も引き続き、国際交流、グローバル人材育成につながる活動を積極的に推進していく予定である。

(大学院工学研究科)

訃報

このたび、^{わたなべのぶあつ}渡邊信淳名誉教授、^{たけうち}竹内 ^{みのる}実名誉教授、^{はやしりきまる}林力丸名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等を紹介いたします。

渡邊 信淳 名誉教授



渡邊信淳先生は、7月28日逝去された。享年91。

先生は、昭和21年9月京都帝国大学工学部工業化学科を卒業後、同24年6月京都大学工学研究所助手、同33年3月同大学工学部助教授、同41年5月同教授に就任された。昭和61年3月停年により退官され、同年4月に本学より名誉教授の称号を授与された。

先生は、長年にわたり溶融塩電解や無機フッ素化学の教育と研究に携われ、新規ナトリウム製造法、アルミ電解やフッ素発生反応で起こる陽極効果、電解フッ素化反応、フッ素-グラファイト層間化合物の合成・物性と応用、等方性炭素、分散メッキによる機能膜形成、液体、溶液に関する研究等について独創的な研究業績を挙げられた。中でも、陽極効果の機構解明およびリチウム-フッ化黒鉛一次電池の研究はこの分野の先駆的な成果に発展し、国際的に高い評価を得ている。諸業績に対して、学界からは、昭和42年3月電気化学協会(現電気化学会)棚橋賞、同55年3月日本化学会賞を受賞、同61年8月モアッサン・メダルを授与され、国からは、同62年4月に

紫綬褒章、平成11年11月に勲三等旭日中綬章を受章された。

学会活動では、昭和51年8月に開かれた日本初のフッ素化学国際会議(第8回京都)で副委員長、平成6年8月に開催された同国際会議(第14回横浜)では委員長、昭和58年4月開催の第1回溶融塩化学および技術に関する国際会議(京都)で委員長を務められた。また、昭和58年4月から2年間電気化学協会副会長、同56年4月から7年間同会溶融塩委員会委員長、平成2年4月から5年間独立行政法人日本学術振興会フッ素化学第155委員会委員長を務められ、フッ素化学と溶融塩化学の普及に尽くされたばかりでなく、昭和52年5月から19年間黒鉛化合物研究会会長、平成4年5月から15年間財団法人応用科学研究所所長に就任され、学界のみならず産業界の後進をも指導された。

さらに先生は、社会人教育を実践され、創造性向上および異分野の人との交流の場となった一般社団法人京都発明協会工業材料ゼミナールの塾長として、昭和55年9月から20年間の長きにわたって、自ら楽しんで研究できる人材の育成に尽力された。

(大学院工学研究科)

竹内 實 名誉教授



竹内 實先生は、7月30日逝去された。享年90。

先生は中国山東省出身、昭和24年に京都帝国大学文学部を卒業後、同28年東京大学文学部大学院(旧制)を修了、社団法人中国研究所所員、東京都立大学助教授等を経て、同48年京都大学人文科学研究所助教授に就任、同50年教授に昇任、現代中国研究部門を担当するとともに、同61年より翌年まで人文科学研究所長を務めた。昭和62年に退官して京都大学名誉教授の称号を受けられた後は、立命館大学教授、北京日本学研究中心主任教授、松阪大学教授などを歴任した。

先生は総合的な現代中国研究の第一人者として、ジャーナリスト的な関心のみならず、歴史・文学・思想・政治といった幅広い領域を融合する研究方法を打ち立てた。人文科学研究所においては、「現代中国の社会と文化」、「転形期の中国」等の共同研究班を組織して、現代中国の実像の解明に努めた。この間、毛沢東に関する人文学的な先駆研究である

『毛沢東 その詩と人生』(昭和40年)に続き、先生は公式著作集たる『毛沢東選集』からはうかがい知れない毛沢東のオリジナル著作の姿を復元すべく、初出時の雑誌やパンフレットなどの原典資料の博搜に努め、『毛沢東集』全20巻を編纂、こうした基礎の上に、優れた語学力・豊かな文学的感性と鋭い歴史的理性を駆使して現代中国研究を行い、国内はもちろん国際的にも卓絶した評価を受けた。このほか、魯迅に関する研究、現代中国に関する文明批評、中国文学作品の翻訳紹介など、深い学殖に支えられたその中国理解により、一般市民から内外の政治家、専門家まで、多くの尊敬を集めてきた。現代中国に関する著作は極めて多いが、中国語版の著作集『竹内實文集』全10巻が平成14~18年に中国で刊行されていることに、先生の学徳の広がりうかがえる。

これらの業績に対し、平成4年には福岡アジア文化賞学術研究賞を受賞、同11年には勲三等旭日中綬章を授与されている。

(人文科学研究所)

林 力丸 名誉教授



林 力丸先生は、8月3日逝去された。享年73。

先生は昭和38年北海道大学農学部農芸化学科を卒業後、同年4月京都大学大学院農学研究科修士課程農芸化学専攻に入学、同40年3月修了、同年4月から食糧科学研究所助手、助教授を経て、平成4年6月より農学部農芸化学科天然高分子化学講座教授に就任された。平成15年3月定年により退官され、同年名誉教授の称号を授与された。退官後は、日本大学生物資源科学部教授に就任され、同20年3月退職された。

先生は、パン酵母からセリンプロテアーゼであるカルボキシペプチダーゼYを発見された。その後、

タンパク質化学の生みの親である米国ロックフェラー大学Stanford Moore-William H. Stein教授(1972年ノーベル化学賞授賞)のもとに留学された期間を含め、晩年まで幅広く構造と機能の相関を探究され、多くの成果とともに弟子を育成された。さらに画期的なのは、物理学で使われていた超高圧力をバイオサイエンスに持ち込み、食品加工でまったく新規な手法となる高圧食品分野を立ち上げ、その発展の中心的な役割を担われた。

また、先生が代表であった生体関連高圧科学研究会においては、食品加工・製造・貯蔵・殺菌に限らず、深海生物など広い分野で多大な貢献をなし、欧米を中心に高い評価を得ている。

(大学院農学研究科)